

新潟大学広報誌
Niigata University
Campus Magazine



新大広報

Campus Forum

No. 151
3月号



新大での 思い出.....

卒業

修了

退官



新潟大学長
長谷川 彰

常に社会の動向に関心を持ち、
バランスのとれた国際感覚を身につけ、
今おかれている世界情勢をしっかりと見据える
洞察力を培っていただきたいと思います。

卒業生、大学院修了生及び 退職される教職員の皆さんへ

平成16年の早春に新潟大学を卒業される皆さん、大学院を修了される皆さん、ならびに新潟大学を退職される教職員の皆さんに、心からお祝い申しあげます。

卒業生ならびに大学院を修了される皆さんには、これまで皆さんを支えてこられた家族や友人、先輩たち、お世話になった地域の人々、指導してくださった先生方など、学生時代に出会った人々への感謝の気持ちを、あらためて思い起こしていただきたいと思います。

現代社会においては、グローバル化が一層進行し、世界の経済や政治は目まぐるしく移り変わっています。このような状況にあっては、世の中を多面的にとらえ、バランスのとれた国際感覚を身につけることが大切です。新潟大学では、社会性と国際性を重んずる教育を目標の一つに掲げ、皆さんとともに目指してきましたが、皆さんには今後とも社会の動向に関心を持ち、今おかれている世界情勢をしっかりと見据える洞察力を培っていただきたいと思います。

退職される教職員の皆さんは、永年にわたり新潟大学の発展に尽くしてくださいました。現在、五十嵐・旭町両キャンパスでは、建物の改修や増築が進み、様相が一変しつつあります。半世紀前に新潟大学が創立されたとき、誰が今の姿を予想できたでしょうか。新潟地震、五十嵐キャンパスへの統合移転等々の困難を乗り越え、ここに至るまでの発展を様々な側面から支えてこられた皆さんに、心から御礼申しあげる次第です。

いよいよ平成16年4月1日から、全国すべての国立大学は国立大学法人となります。国立大学の法人化は、少子化・高齢化社会の進行、高等教育の大衆化、科学技術の進歩等々、様々な社会情勢の変化を背景としていますが、各大学の自主性・自律性を高めることを目指した、新制大学はじま



法人化後においても、新しい新潟大学を創造するための努力を継続します。皆さんには、同窓会活動などを通して、新潟大学を力強く支援していただきたいと思っています。

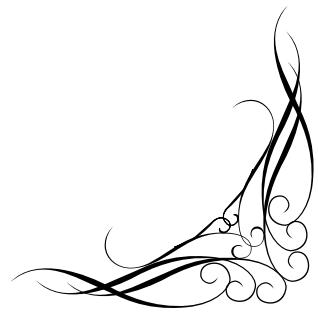
って以来の大改革であります。新潟大学では、これを契機により一層国際競争力ある個性豊かな大学となるために、従来からの教育、研究、社会貢献のすべての活動を見直し、必要な改革を推し進めてきました。

改革の一端として、今年4月には、法科大学院の設置をはじめ、大学院保健学研究科の設置、大学院現代社会文化研究科及び自然科学研究科の拡充・改組、歯学部口腔生命福祉学科の新設等が実現する運びとなりました。すでに、平成15年度、大学院医歯学総合研究科に医科学専攻が設置され、また、昨年10月には医学部及び歯学部の附属病院は統合し、医歯学総合病院となっています。さらに、本学が世界に誇る脳研究所は、二つの卓越した研究センターを有するまでに発展しています。

4月1日の法人化に向けた新しい新潟大学の全体像は見えてきましたが、これで新潟大学の改革が終わったということではありません。むしろ、これは、新しい新潟大学を創造するための出発点であり、法人化後においても不断の改善に努め、教育研究活動の質の向上を図らなければならないと考えております。

法人化後における新潟大学は、これまで以上に社会からの理解と支援を必要としております。卒業生と大学院修了生の皆さんには、大学を離れても同窓会活動などを通して、新潟大学を力強く支援していただきたいと願っております。また、退職される教職員の方々におかれましては、新しい新潟大学の発展ぶりを温かく見守り、私たちを励ましていただきたいと願っております。

ここに人生の一つの区切りを迎え、新たに出発される皆さんに、あらためて心からお祝い申し上げます。





この4年間を振り返ってみると、
「あっ。」という間もないほど
短いものだったように思えます。

振り返って気付いたことなど

人文学部行動科学課程
白砂 一樹

この4年間をこの機会にあえて振り返ってみると、「あっ。」という間もないほど短いものだったように思えます。月並みな感想ですが、気付いたときにはもう、その感想をいじめてしまったあとだったのです。つまらないことは悪いことではないのだから、まあ、よしとしたいところです、勘弁して下さい。

楽しい時間は早く流れる、と一般に言われます。隣の人に訊いても、このことは認



めてくれると思います。ところで、この4年間には確実に楽しくないこともいろいろとありましたが、そういったことを思い

出したからといって、「短いものだった」という感想に変わりはありません。実は楽しいことだったのでしょか？ あまり深く考えると長くなるので、考えるのをこれくらいでやめた方が楽しい気分のままでいられそうです。過去は実は終わることなどないと考える限りは、思い出す機会はいくらでもあるだろうから、たぶん大丈夫です。楽しくなかったことが楽しくなったのだとすれば、実は過去はまだ終わってなかったわけです。だから、「今はまだ人生を語らず」とした方がいいような気がしてきました。語ったことが変化するかもしれな

いのなら、嘘をついてしまう可能性が結構あるかもしれないからです。

卒業にあたって

大学院教育学研究科
上野 あゆみ

新設された臨床心理学分野の第1期生として教育学研究科に入学したのが2年前。あっという間でした。さまざまな面接技法や心理検査の基礎を修得するために学部以上にぎっしり詰まった時間表、教育相談センターや病院、児童相談所での臨床心理実習、そして、修士論文。日々の課題をこなすだけでいっぱいなの、ここは修道院かタコ部屋かという毎日でした。けれども、そのような中で、私は、院の先生方から、第一線に立つ臨床心理士、教師、看護師の皆様から、自分が担当させていただいたクライアントの方から、そしてなによりもゼミの仲間から、ほんとうに多くのことを学びました。ここで学んだこと、体験したことは、私の一つの原点になったように思うのです。4月から病院で心理職として



卒業、修了

平成15年度



ここらを使った面接ができる
臨床心理士を目指して頑張っていきたい。

勤務することになっています。2年間で得たものを生かし、ここらを使った面接ができる臨床心理士を目指して頑張っていきたいと思ひます。

卒業にあたって

法学部法政コミュニケーション学科

伊藤 みのり

私にとって大学とは、出会いの場でした。その中でも「中国」との出会いは最も衝撃的であり、「中国について学ぶ」という目標と「中国関係の仕事に就く」という夢へのきっかけとなりました。また、それによって、互いに夢を語り、励ましあえる友人たちと出会い、北京大学国際関係学院への留学も実現することができました。ひとつひとつの出会いが私にとってかけがえのないものであり、それらの出会いがあったからこそ今の私があるのだと思ひます。大学入学以来、やりたいと思ひていたことをすべてやり終えた今、私は満足感でいっぱいです。多くの出会いと夢中になれるものを見つけたこと、信念を持って夢を追いかけたこと。それが私の大学生活のすべてです。そして、そんな私を支え続けてくれた多くの人々に心から感謝しています。

今、卒業というひとつの節目に立ち、ここからの一歩が新たな夢への一歩であることを信じて、新しい生活に飛び込んでいきたいと思ひます。



卒業にあたっての思ひ ～新潟大学の恩恵～

経済学部経営学科

加藤 里実

私は三年次編入を経て新潟大学へ入学した。故に実質上の在籍期間は二年間だけである。それでも、三年目に来てよかったと思ひます。三年からは教養や基礎の科目が一通り終わり、専門科目が始まるからである。それまで私が夢中だったことは、大学での勉強でもサークル活動でもなく、アルバイトであった。

確かに、大学での授業にも興味を惹かれる科目も多々あったが、何のための学問かが分からなかった。もっと言えば、実生活とかけ離れていた。だから、私はバイトに熱中した。しかし、お金を稼ぐだけに終わらなかったというところが私のすごいところである。

もちろん、バイト先ではお金を稼ぐことや友達を増やすことに心血を注いだが、それ以外に、バイトで起きた問題や疑問を学問として捉え、それらを大学で勉強したり、授業でさらに知識を深めたりすることができた。幸い私の専攻は経営学だったので、バイト先の業務内容や業界事情とリンクすることが往々にしてあった。

そういった意味で新潟大学は私に学ぶ場を提供してくれ、私はその場を最大限活用することができた。これから社会へ出てからも、働きながら学び、学びながら働くというサイクルを繰り返していきたい。



本人中央

これから社会へ出てからも、働きながら学び、学びながら働くというサイクルを繰り返していきたい。



大学入学以来、やりたいと思ひていたことをすべてやり終えた今、私は満足感でいっぱいです。



これからも、自然の仕組みに心を躍らせ、
思いを馳せる喜びを感じていきたい。

卒業にあたって

理学部物理学科
安野 琢磨

2004年を迎え、私たちもいよいよ卒業することになりました。振り返ってみると、友人にも物理を勉強する環境にも恵まれ、豊かな学生生活であったと思います。

もともと私が物理に興味を抱いたのは、小さい頃両親に買ってもらった図鑑がきっかけだった気がします。その図鑑には当時の自分の自然観では到底理解できない様々な現象が描かれていました。あらゆる物を吸い込んでしまうブラックホールが存在、etc...、などに心から驚愕したのを今でも良く覚えています。

そのような自然の一端をのぞいてみたいという気持ちで入学した物理学科でしたが、多くの人と様々な事について議論をし、それぞれの自然観を語り合った日々をととても大切に思っています。

3月で卒業という節目を迎えるわけですが、私が本学で学んだことは私の人生において有意義であった事を確信しています。



これからも、自然の仕組みに心を躍らせ、
思いを馳せる喜びを感じていきたいと思
います。

変化

医学部医学科
羽場 真

外は今日もみぞれのような重い雪が降っている。テレビではニュースキャスターが毎日の日課のように海ひとつ隔てた国の奇妙な日常を嘲ったりしている。日本代表のメンバーには自分よりも年下の選手がもう何人も名を連ねている。世の中も随分変わったと思いつつ、自分はどうかと振り返ってみる。確かに幾らかの酒も飲めるようになったし、人並みに恋愛なるものもしたような気はする。人に偉そうにもものを言うようになったし、あの時は漠然としていた将来も徐々に現実味を帯びてきた。それは自分が六年前と多少は変わったという事なのかもしれないが、その変化は進歩と言える



本人右側

卒業、
修了

平成
15
年度



これから社会に出ても、
自分がしてきたことが正しいか間違っているか、
自分は果たして前に進んでいるのかどうかと、
自問しながら生きていくように思う。

るものなのかはよく分からない。親元を離れ、大学で六年も学んできてこのようにしか思えないのも少し淋しいが、これから社会に出ても、自分がしてきたことが正しいか間違っているか、自分は果たして前に進んでいるのかどうかと、自問しながら生きていくように思う。そのように気づかせてくれたのがこの六年間かもしれない。窓を開けたら降っていた雪が雨に変わっていた。こたつで一人、煙草に火をつける。

卒業にあたって

医学部保健学科
松嶋 未央

4年前の春、看護を学ぶために、ここに来ました。4年後に大学を卒業して、看護職として働くことを夢見ていました。

専門分野の講義が始まると、初めて目にするものや初めて聞く言葉が溢れていました。耳慣れない言葉に戸惑いながらも、学ばなかったことを、学べる喜びを感じていました。

授業や実習では、「看護って何だろう。」「健康って、どういうことだろう。」「幸せって何だろう。」と折に触れて考える機会を持ちました。しかし、今でも答えは見つかりません。

4年の間には、たくさんの人に出会いました。迷ったときもあったけれど、たくさんの人に支えられて、学び続けることができました。これからも、看護職として働く中で、素敵な出会いが数多くあると信じています。ひとつひとつの出会いを大切にしながら、ほんの少しでも前に進んで行きたいと思います。

大学生活を振り返って

歯学部歯学科
谷島 里誌

卒業にあたって一番思い起こされるのは、やはり6年次での総合診療部における臨床実習です。この実習は、患者さんと直に接し歯科診療を行う初めての機会であり、まさに歯科医師としての第一歩を踏み出したという実感をもつことができました。

総合診療室に来ていただいた患者さんには、自分の未熟さからご迷惑をおかけすることもしばしばありました。しかし実習期間を終えたとき、ある患者さんから「1年間ありがとう。卒業後もがんばってください。」と励ましの言葉をいただきました。この言葉は、卒業後の自分にとって大きな支えになると思います。

また、学生生活で一番印象に残っているのは、6年生まで続けた部活動だと思います。部員の数も少なく決して強くはありませんでしたが、限られた時間の中、仲間とともに部活に打ち込むことができたことは、自分にとってよい思い出になりました。

卒業後は新潟を離れることとなりますが、新潟大学で学んだことを糧とし、これからの人生を歩んでいきたいと思っています。



本人右側



実習期間を終えたとき、ある患者さんから「1年間ありがとう。卒業後もがんばってください。」と励ましの言葉をいただきました。この言葉は、卒業後の自分にとって大きな支えになると思います。



ひとつひとつの出会いを大切にしながら、ほんの少しでも前に進んで行きたいと思います。



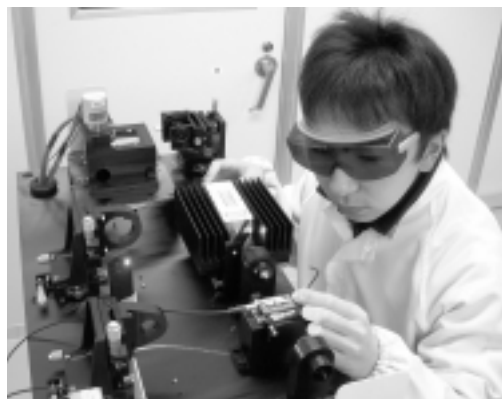
何かを得るために努力することの大切さを
この4年間で学ぶことができました。

感謝

工学部機械システム工学科

菅 康志

卒業するに当たって、今一番に思うことは「新潟大学に来て本当に良かった」ということです。友達にも恵まれ、環境にも恵まれ、食べ物にも恵まれました。部活にも、そして部活の仲間にも恵まれ、4年になって研究室にも恵まれ、毎日とてもやり甲斐のある生活をおくることができました。更にこの大学に来て、以前に増して自ら考え自ら学ぶ姿勢、自らを管理する能力、自ら実行する能力を身に付けることができました。何もかもこの新潟大学から頂いたような気がします。そんな頂いてばかりの生活でしたが、頂いたというよりも自ら取りに行ったと言っても過言ではありません。自ら取りに行かなければ得るものも何も無かったですし、何かを得るために努力することの大切さをこの4年間で学ぶことができました。4年間、自分を育ててくれた新潟大学に感謝し、これからも日々努力して充実した生活をおくっていきよう頑張りたいと思います。有難う御座いました。



卒業にあたって

農学部応用生物化学科

井戸 一博

楽しい時間は早く流れるというが、本当にあっという間の4年間であった。

学生生活を振り返って印象に残っていることというと、炎天下の中の部活や、毎日夜遅くまでいた研究室での日々、仲間と美味しい酒を飲んだこと、教育実習でのこと、教員採用試験に受かった喜びなどが思いだされる。辛いこともたまにはあったが仲間に支えられてどれも楽しく充実したものであった。

そんな4年間に出会った人々との体験から学んだ中で一番大きなことは、尊敬し合う気持ちの大切さである。人との関係で好きとか嫌いとかいう情は大事だけど、情だけだったら流されたり、その情故にお互いの感情が歪むことだってある。友達同士でも、親子の中にでも、恋人同士でも、教師と生徒との間にも、尊敬し合う気持ちがあれば仲がもつれたりせず、常にとてもよい関係をつくることができる。

これから教員になるにあたり、尊敬し合



4年間に出会った人々との体験から学んだ中で
一番大きなことは、尊敬し合う気持ちの大切さである。

卒業、
修了

平成15年度

おうとする意思を持ち続け、新潟大学での経験を生かし、熱く、楽しく、良い教師になれるよう努めていきたいと思う。

卒業に当たって

大学院自然科学研究科
富本 和也



大学院博士前期課程2年間の研究は、私のこれまでの学生生活の中で最も有意義なものであった。私が研究に携わる中で最も面白いと感じたのは、データ集め、実験・検証するうちに、当初の仮説を否定するような結果がしばしば得られることである。手順を何度も確認しつつ、いろいろと条件を変えて実験しても仮説に合わないその「誤った」結果が出てしまう。そこで発想を変え、その実験結果に合う、別の仮説を模索したところ、これをうまく説明できる、より興味深いアイデアに行き着いた。必ずしも当初の目的どおりにならない、たとえば言葉は悪いが、これは裏を返せばもっと面白く、興味深いものに化ける可能性がある、ということでもある。この点が私の感じた「研究」の魅力であった。前期課程を卒業後、私はさらに3年間の後期課程に進学するが、今後も研究に、後進の指導により一層努力していきたい。



3年間を振り返って

大学院現代社会文化研究科
平野 美樹子

大学院1年目の2001年12月、アメリカによる空爆によりパキスタンに流入したアフガン難民救援のため、急遽国際赤十字赤新月社連盟（以下、連盟）の医療要員としてアフガニスタン国境の町に派遣されることになりました。

現地派遣にあたり国境付近の山岳地帯にはアルカイダの要人が身を潜めているという報道もあり、現地のセキュリティに関する漠然とした不安がありました。加えて派遣にともなう研究計画への影響も大きな不安材料でした。

セキュリティに関しては連盟を信頼するしかないと心を決め、また学問をとるか実践をとるかの迷いには、両方を取ろうという欲張りな選択をすることにしました。結果として派遣の中で見出されたことは、そのまま研究テーマに活かされることになりました。

社会人ということで夕方にしか受講できないという時間的制約も、指導教官の山崎先生ほか諸先生方や大学院生の皆様のご理解とご協力のおかげでなんとか乗り越えることができました。本当にありがとうございました。



国際赤十字赤新月社連盟の要員と共に（パキスタン・クエッタ）



社会人ということ
で夕方にしか受講できないという時間的制約も、
皆様のご理解とご協力のおかげで
なんとか乗り越えることができました。



研究に携わる中で最も面白いと感じたのは、
データ集め、実験・検証するうちに、
当初の仮説を否定するような結果がしばしば得られることである。



教員養成学部は色々な専門分野の教員に接する機会があり、会話の中からほんの少しだがその世界を垣間見ることが出来た。余生を送る身にとっては大変有難い経験である。

御礼

教育人間科学部教授
伊藤 浩史



28年間の大学生活には色々な節目があった。民間からの転職であった私にとって、新潟大学教育学部への赴任はかなりの決断と勇気が必要だった。高田分校での7年間は音楽科の実技系を担当しながら自分自身も「教員養成」を勉強しなければならなかった。大学教員としての最初の大仕事は「教育学部の統合」であった。音楽科が責任を任されたのは楽器関係の受け入れで、当時一番若年であった私が新築された五十嵐校舎で受け取りを取り仕切ったのである。圧巻はピアノで、高田からの52台を含め、長岡や新潟から何と60数台が運ばれて来た。運送と組み立ての業者が異なった為に、校舎中にピアノが溢れ返っている状態だった。ともあれ、それから23年。大学院設立時には自分の専門を変更せざるを得ない場面もあった。当時の歌代学部長の大きな励ましがあったからこそ、成就したものと思う。

教員養成学部は多数の専門教員が集結した学部である為に、色々な専門分野の教員に接する機会があり、会話の中からほんの少しだがその世界を垣間見ることが出来た。余生を送る身にとっては大変有難い経験である。

無事に退官を迎えることが出来、安堵の感を強くしているのが本音である。

私を育ててくれた新潟大学、そして学部

の先生方をはじめ事務官諸氏、学生諸君にも心からお礼を申し上げたい。

教官の鏡

教育人間科学部教授
佐藤 勝弘



「最近の学生は全もう...」「一体彼らの思考回路はどうなっているんだ...」などと、定年が近づいてきた最近、学生を嘆いてみたり愚痴ることが多くなった自分に気がつく。

「Rich Experience and Poor Information」の時代に育ってきた40年前の私たちと、有り余る情報やITグッズを有効に活用しバイタリティに活動をしている「Rich Information and Poor Experience」の社会で育まれてきた現代の学生とは思考や言動が異なるのは当然のことと理解はしていても、彼らにはいつも驚かされている昨今である。

しかし、私たちの本務が学生の教育であることからみれば、たとえ、予測を超え理解し難い彼らの言動であっても、それは私たち教官の教育そのものの結果であり、「今の学生は...」ということは換言すれば自分の研究教育の不十分さを嘆き愚痴ることに他ならないことかもしれない。

数年前、地元ラジオ局の放送原稿で「教育実習」というタイトルで彼らの実習授業について書いたことを思い出す。「(中略)彼らの授業を観るときはいつも汗をかいて

退官

平成15年度



私が少し手を抜いた授業をすれば、それがそっくり、学生の手によって再現されてしまうのです。

います。それも冷汗をです。あんな教え方でこども達に怪我をさせはしないかと、間違った内容を教えてはいないかなどの心配もありますが、それ以上に、彼らの拙い教え方は見方を変えれば、私の大学での授業そのものだと言えるからです。私が少し手を抜いた授業をすれば、それがそっくり、学生の手によって再現されてしまうのです。(略)

学生が、「教官の鏡」だとわかりかけてきた時には定年を迎える年になっていた。

テニスコートよ さらば

教育人間科学部教授

高原 隆一

君とのつき合いは32年になるね。少々衰えを感じないかがかね。いやいや貴兄こそ満65才、ヨレヨレではないのかね。何を言うか「人は希望と共に若く失望と共に老いる」だ。これからが本当の人生であり、夢もあり、楽しみだよ。私が新潟大学教養部に赴任したのは昭和43年1月。大学紛争を経て五十嵐キャンパスへの移転が昭和45年4月。君が誕生したのは昭和47年だ。

学生数も段々と多くなりコートの増設となった。60人授業を進めるには10面が必要とネバッタ。そして陸上競技場の西側を選んだ。



本人左側

池があり、ぶどう畑の傾斜地だ。コートの職人さんは旧知の方々に頑張ってもらった。このコートは基礎部分が甘いから手のかかるダダ子だからねとよく言われた。雨上がりにはすぐにローラーをかけないとひび割れをするし、日照りだとすぐ乾き、私を呼ぶものだから早朝から水まきをよくやったね。

君の周りには防風や防砂のための樹木などない丸裸のコートだったね。私の25年永年勤続の表彰時にカンパをお願いしたら、3万円余りも集まり、ソフトテニス部員と共に300本程植えたね。その松も今は私の3倍もの高さになっちゃったよ。

君には本当にお世話になった。何時かまたお会いできる日を愉しみにしている。

さらばよ、愛するテニスコートよ。

ひとりごと。私の後任もなく非常勤もとれず新潟大学からテニス授業が一つもなくなることに一抹の寂しさを感じる。



新潟大学からテニス授業が一つもなくなることに一抹の寂しさを感じる。



四季折々のキャンパスの自然と、
そこに働く人々の知恵と志しが、
私にいつもエネルギーを与えてくれました。

感謝・御礼

教育人間科学部教授
谷口 隼



この3月末日をもって、定年退職を迎えるに当たり、新潟大学で働く教官・事務官・技官の皆様、また、かつて本学に勤務されていた教官・事務官・技官の方々、さらに本学生活協同組合の方々、また、本学に係わるお仕事でご縁のあった様々の職種の方々、あなた方、お一人お一人の温かいご支援のおかげで、私、充実した教育・研究生活に専念出来ましたこと、心より深く感謝・御礼申し上げます。四季折々のキャンパスの自然と、そこに働く人々の知恵と志が、私にいつもエネルギーを与えてくれました。先年、ある先生が新聞のエッセイでスターバト・マーテル（悲しみの聖母）の曲にふれておりました。大好きな曲の一つです。また、ある先生は「ほんのこべや」誌上で須賀敦子の書を推薦しておりました。これも愛読している作家です。また、ある先生は、南仏モンペリエでは、教会とモンペリエ大学医学部が渡り廊下で繋がっていることをご存知でした。私が、お会いしたことも無い方々と趣味や知識を共有できるそんな人材豊かな本学に定年まで、在職できましたこと、うれしく、また誇りに思っております。

本来ならお一人お一人をお訪ね致し、これまでのご支援の御礼を申し上げるところであります。本誌をかりまして、重ねて

感謝・御礼申し上げます。有り難うございました。皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。お元気で、さようなら。

未踏の荒海への 航海に乗り出すに あたって

法学部教授
鷺見 一夫



私が、横浜市立大学から本学に転任してきてから11年半という歳月が、あっという間に過ぎ去った。その間、本学では、実に快適な研究・教育生活を送ることができた。その最大の理由は、法学部では学閥がないために、人間関係の煩わしさがなかったためである。

現在、不思議に定年を迎えたという実感が湧かない。これは、目下、政府開発援助（ODA）訴訟の第1号案件となったコトパンジャン・ダム訴訟において、インドネシア・スマトラ島の被害住民のために奔走しているためであろうか？

この裁判は、タイ、スリランカ、フィリピンなどの人々からも注目されている。今後は、この類いの訴訟でかけずり回ることになるのではないかとと思われる。その意味では、跡を振り返っている余裕はなく、これまでやり残したことによろやく着手できるようになったという心境である。

退官

平成15年度



本学では、実に快適な
研究・教育生活を送ることができた。

退官にあたり

医学部保健学科教授
金山 勝三



昭和56年(1981)4月、医療技術短期大学部診療放射線技術学科(放射線生物学担当)に赴任、以来23年間、新潟大学でお世話になりました。この3月、医学部保健学科第1期生と一緒に旭町キャンパスを去ることになりました。

この間、西大畑の公務員宿舎とキャンパスを往復する毎日でした。通勤途中、遠回りしてニセアカシアの花の香りが漂う西海岸公園を散歩したり、四季折々の花を愛でたり、小さな公園で大きな自然を満喫しました。水族館のペンギンたちに挨拶するのも楽しみでした。あるとき、「ケンケン」という甲高いキジの警戒音のする方にそっと近づくと、すぐ足元に白いネコが身を低くして「来るな」と言わんばかりの激しい形相でこちらを見上げていました。雛を狙っていたのでしょうか。折角のチャンスを邪魔され、今にも襲いかからんばかりのすごみでした。そっと後ずさりしてその場を離れました。自然はまさに感動の宝庫です。恵まれた自然環境のもと、本学で医療技術者教育に携わった幸せをかみしめています。

これからの目標は、「三かく運動」の実践です。「汗かく」、「恥かく」、「ものかく(書く)」といいます。体を動かして汗をかき、新しいことに挑戦して恥をかき、ものを書いて(ときには絵を描いて)、ボケ防止を心がけたいと思っています。

長い間、お世話になりました。新潟大学のご発展をお祈りいたします。

退官にあたって

工学部教授
愛田 一雄



1965年10月に会社員から転職して工学部に赴任してから、38年6ヶ月の勤務生活が終わります。新設された自動制御講座の助手の公募が学会誌に掲載されているのを見て、応募しました。面接試験のときに宿泊した長岡の旅館で食べた御飯の美味しさを、いまでも忘れることができません。

現在では、教員の採用はすべて公募により行い、よほどの業績がないかぎり採用されません。しかし、当時は地方大学への就職を希望する者が少なかったせいか、会社で自動制御を少し手がけていたとはいえ、業績零の身で運良く採用されました。そして、多くの人に迷惑を掛けながらも、なんとか勤め終えることができたことを大変感謝しております。

昨今、少子化により学生の質が落ちてきたと言われております。しかし、新潟大学の学生はまだ大丈夫です。講義では、他大学で見られるような「私語」は全くありません。そうかといって、講義内容をすべて理解している訳ではありませんが、全員が「やればできる能力」を持っていると思っております。

これまで多くの先生方が退官されるのを見てきましたが、そのとき必ず耳にしたことは、「先生は良いときにお辞めになる。」という言葉でした。今年は独法化直前でもあり、「最も良いときに」という言葉を背に受けて辞めることとなりますが、これからも新潟大学の発展を祈り続けるつもりであります。

長い間、本当に有り難うございました。



講義では、他大学で見られるような「私語」は全くありません。全員が「やればできる能力」を持っていると思っております。



体を動かして汗をかき、新しいことに挑戦して恥をかき、ものを書いて(ときには絵を描いて)、ボケ防止を心がけたいと思っています。



教育研究の現場は、最終到達点のない問題に、
学生とともに悪戦苦闘するところかも知れない。

大学生活を ふりかえって

工学部教授
板垣 厚一



本学工学部に奉職したのは、昭和40年1月
で、学生時代を加えると、人生の大部分を
本学に、お世話になったことになる。

当時の教育、研究環境は、かなり貧弱であ
った。建物(長岡市にあった)は木造で、
暖房は石炭かガスストーブで、冷房はな
かった。教育機材は、黒板とチョークが主
で、配布資料は、ガリ版刷りで、専門書
なども少なく、教員の講義は、貴重な知
的情報源であった。研究室では、不平等
電界中の金属隔壁効果の問題に取り組
んでおり、絶縁破壊時の電圧波形を記
録する必要があった。このため、高速
度ブラウン管装置にカメラを取り付け、
35mmのX線用フィルムに撮影し、現
像、焼き付けを行い、ようやく絶縁破
壊電圧瞬時値を測定することができた。

現在では、教室、研究室の環境は、飛躍
的によくなっている。教育機材も、OHP、
ビデオプロジェクター等があり、教育メ
ディア、教科書も豊富にあり、eラン
ニングにも適した環境になっている。高
速度のインパルス電圧波形も、簡単に
プリントアウトしたり、フロッピーディ
スクにセーブでき、データ処理の時間短
縮化が進んだ。

このような状況変化にも関わらず、気
中の不平等電界の絶縁破壊問題は、研
究手法は高度化しているが、依然とし
て解決されていない。また、教育の
方法論にしても、教育環境が充実して
きているが、納得できる方法が確立
せず、試行が繰り返し行われ

ている。教育研究の現場は、最終到達
点のない問題に、学生とともに悪戦苦
闘するところかも知れない。状況変化
が早い折、このような問題解決には、
在学生、OBの若い人に期待するところ
が大きい。

時間的制約の少ない恵まれた教育研
究の場で、長い期間を過ごさせていただ
いたことを心から感謝いたします。こ
れも、在学生、OB、教職員のご支援
のおかげと思っております。最後に、
本学の益々の発展と皆様のご健勝を
祈念いたします。

退官にあたって

工学部福祉人間工学科教授
大鍋 寿一



私は、新潟大学に約6年前に参
りましたが、はや退官とは、月並み
かもしれませんが、昨日来たよう
で、実際「早いな!」というのが
実感です。

日本の国際競争力ランキングはこの
10年で49カ国中1位から30位へ
転落、新しい発明や技術に関心を
示す人の割合は14カ国中14位、
その一方で高齢化率は世界一の
状態で「超高齢社会」を迎えよう
としています。

そのような中で全国の国立大学
はこの4月から独立行政法人とな
り中期目標・中期計画を文部科学
省へ提出し、認可を受けていま
す。各大学はその目標をどこに
置いているのだろうか、独法化
を待たずして大学を去る者にと
って、文部科学省は日本の目標
をどこに置いて認可をしよう
としているのか、各大学が5年
後その

退官

平成15年度



「眞のゆたかさ」という新しい価値観の創出に
チャレンジして行きたいと思っています。

目標を達成したあかつきには、「超高齢社会」の日本は世界の中でどこにいるであろうか、気がかりです。

小生は新潟大学退官後米国University of Pittsburghで福祉人間工学の教育研究を続けますが、福祉人間工学の教育研究を通して福祉工学・生活支援工学・人間支援科学のあるべき姿は勿論、私自身もその一員となる日本の超高齢社会システムのあるべき姿までを自分自身にも照らし合わせながら考えて行きたいと思っています。「真のゆたかさ」という新しい価値観の創出にチャレンジして行きたいと思っています。

5年9ヶ月の間、皆様のご協力により、新潟大学での教員生活を終え、新しく外国での教員生活へチャレンジする「気合」を与えて下さったことに感謝いたします。

退官にあたって

工学部助教授
加賀 利広



1966年（昭和41年）、当時長岡市にあった工学部共通講座（工業数学講座）に数学担当教員として採用されて38年間新潟大学にお世話になりました。

赴任当時、工学部には専門関係の書籍雑誌等の研究資料はほとんどなく理学部数学教室のセミナーに参加させていただき重い雑誌を手にして毎週2日長岡から西大畑と五十嵐（浜）に電車で通いました。統合の話は着任の時間聞いていましたが、統合移転問題、大学紛争、統合白紙撤回等を経て新潟の地で一緒にセミナー等ができるようになるまで15年が経っていました。その後工学部の改組で共通講座は廃止され情報工学科数理情報講座へと教育研究環境が変りました。

工業数学講座当時、院生向けにボルチャンスキーの「最適制御理論」など制御理論を中心に学生と一緒に数学と工学との関わりを学び、数理情報講座では代数幾何符号に関する教育研究に従事し、学生時代最も応用からかけ離れていると思って選んだ代数幾何学（特に正標数の世界）までもがデジタルの世界に必要なになってきたことに驚き嬉しく思っています。ものを創り使うための理（コトワリ）としての数学の必要性を実感しております。

最近、「理数離れ」、「人材劣化」などと言われていますが、理なくしては何も生まれないのではないのでしょうか。新しい大学は理の教育を大切にしたいと思えます。最後に、講義やセミナーなどでお付き合いした方々やお世話になった皆様に感謝いたします。



ものを創り使うための理（コトワリ）としての
数学の必要性を実感しております。





空気も水もお米も美味しい新潟の
住みよい生活環境は去りがたい。

偶感

工学部教授
南 一男



大学院自然科学研究科の発足のために赴任したのが昭和61年春だった。新潟は深く雪に埋まった白銀の世界だった。早いもので、あれからもう18年になる。その間に内外で大変な変化が起こった。雪があまり降らなくなった。重苦しい脅威だったソ連が崩壊した。日の出の勢いのバブルがはじけた。希少価値であった博士課程の存在も、大学の自治の象徴であった教授会の性格も変わってしまった。そして今や本学は行方も知らない法人になるうとしている。現在の若い教官を見ると気の毒に思う。以前と違って学務の雑用がやたらに増えてきた。これでは研究をする時間がないだろうと思われる。一方、老兵は消え行くのみである。私は本学で思う存分勉強をさせて頂いた。自分がどれだけ新潟大学に役立ったかは自信がなく申し訳ないが、深く感謝している。学者には2種類あって、年をとると自分の業績に納得する人とそれが出来ない人があるようだ。私は後者である。まだ心の整理が出来ていない状態である。新潟での生活は、駐車場の心配をしないで自動車です出できるところがアメリカに似ている。空気も水もお米も美味しい新潟の住みよい生活環境は去りがたい。

雁道（かりみち）

農学部教授
小島 誠



学生時代を加えると本学には実に30年お世話になったことになる。新しく植物ウイルス学を講じることができたことを感謝したい。最後の4年、教養教育で楽しいおもいもさせて貰いました。初夏のとある朝、五十嵐浜へ学生（自由主題学類コロキウム）と出てみた。誰一人としてハマヒルガオの名を知らない。佐渡の島影には足元のハマヒルガオが似合うと教え、一句をものにしてもらった。昼顔といえば飯島晴子の〈昼顔のあはれは途方に暮るる色〉の一句を思い出す。省みれば自分はいつも途方に暮れて歩いて来た。他人はいざ知らず自分ではそんな気がしてならない。ともあれ、今日まで歩み続けて来られたことをみなさんに感謝せねばなりません。瞑れば身ほとりに空白感がなくもない。恩師、先輩、同僚、後輩で幽冥界に逝かれた方も少なくない。〈葛の花来るなといったではないか〉晴子の一句は怖い。彼岸から「来るナ！」と言っているのは誰か。お言葉に甘え暫くはそちらには参りませんとおことう。

〈雁のあめ空には雁の高貴かな〉は先師斎藤玄の佳什のひとつである。雁が渡れば空には高貴な「雁道」が残るというのである。日本へは秋、北から渡って来る。そして春には再び北へと帰って行く。帰るふるさとのない私は此処新潟の地で定住漂泊しよう心に決めている。新生国立大学法人新潟大学の発展と深化を祈念しつつ筆を擱く。永いこと有難度うございました。



帰るふるさとのない私は此処新潟の地で
定住漂泊しよう心に決めている。

退官

平成15年度

新潟大学を去るに あたって

農学部教授
豊田 勝



昭和47年に民間のコンサルタント会社から新潟大学農学部に着任し、以来32年、ただ歳月だけが過ぎ去り定年を迎えることになりました。マンネリ化した講義を改善しなければならないと気付いたのは技術者教育としての改革論議が始まったごく最近のことですし、自分の研究の社会的意義をもっと外部に訴えるべきだったと気付いたのも研究評価用の資料を整備しているときです。対人恐怖症気味の私にとって大勢の前で話すことは大変なストレスだったことも原因していますが、組織的な点検・評価がないと怠惰に陥りやすかったことも認めざるを得ません。大学の教員は教育や研究以外にも学内外の各種委員を引き受けなければならないことを知り、任務をできるだけ忠実に果たすよう努めました。しかし、赴任早々にストを実行した職員組合の執行委員、学生からの団体交渉を受けた学務委員など、自分の能力を超えるものが多く、今日に至るまで多くの皆さんにご迷惑をかけ、またお世話になりました。これまでを振り返って感じることは、組織を存続させるには、生物と同様に、相当なエネルギーを要し、不断の点検と改善の努力が必要だということです。外部からのストレスに適応しなければ多分生き残れないことも生物界と同じでしょう。急テンポで進む改革の中で、新潟大学として、また教職員や学生として、貴重な個性を活かして社会的に高い評価を得られますよう祈念いたします。長い間ありがとうございました。

「演習林」退官記

農学部教授
松崎 健



大佐渡山地の北部山稜にある新潟大学の森には、天然の杉が群生している。樹齢数百年の杉の巨木が存在する。尾根には荒涼とした禿斜地も幾箇所があり、その対比もあって、厳しい気象条件下で生育困難な山背の天然林の存在は、訪れる人達に何らかの感動を与える。新大勤務21年間の最後の5年間をこの佐渡演習林で働かせていただいた。予算・組織規模が減少する状況にありながらも、学部内外の多くの関係者の方々のお陰で、知名度も高まり、利用者見学者の数は着実に増加し続けた。世界遺産とまではいかなくても「新潟大学遺産」ともいえる佐渡演習林の天然林を永く遺したい。百聞は一見にしかず。出来るだけ多くの人に、「演習林」を体験してもらいたい。しかし、現状では利用限界に近づいている。利用希望時期の集中がある。対応する現地スタッフ数も少ない。林道の補修整備、安全管理には経費がかかる。問題は多いが、全学的視点から解決を望む。

また、佐渡島は、周囲を海で囲まれ、自然環境が独立しているとみなせる。演習林は、島全体を視野に置いた学際的な研究の拠点になりうる。さまざまな分野の研究者が利用できるように総合的な施設の充実をはかってほしい。地域貢献のためにも、佐渡に新潟大学の総合研究所があつていい。演習林が何らかの役割を担える。演習林の発展を期待する。



「新潟大学遺産」ともいえる
佐渡演習林の天然林を永く遺したい。



組織を存続させるには、生物と同様に、相当なエネルギーを要し、不断の点検と改善の努力が必要だということです。



越後の暖かい人々と美しい花々に 出会えたことに感謝している。

新潟で35年

大学院医歯学総合研究科教授
花田 晃治



1969年2月に、母校の東京医科歯科大学から新潟大学歯学部附属病院講師として赴任した。35年前に国境の長いとんねるを抜けると、ほんとうに雪国であった。その白さは驚異であり、脅威でもあった。

1977年11月に教授に昇任してからでも27年が経過している。この間にあって、越後の暖かい人々と美しい花々に出会えたことに感謝している。

教授になる直前の1977年8月に「講談社発行、読書人の『本』」を手に入れている。そのなかに、扇谷正造「ああ、これが“私の大学”」というのがあった。

フランスの哲学者であり教授であるアランによる卒業試験の問題は「いま、ここに人生に絶望した一人の売春婦が、わが運命をはかなみ、セーヌ河に身を投げようとしている。君は、なんと行って、彼女の自殺を思いとどまらせるか」であった。歯学部の学生さんにここまで問いつめることはないかもしれないが、このような真摯な気持ちを持ち続ける歯科医に教育するには、と考えたことを思い出している。

筆者がそこから想起したことの一つは、アメリカでのダイヤル・フレンド、すなわちまず話を聞いてあげること、という。これならできそう。もう一つはチャップリンが映画「ライムライト」のなかで聞いてやったことと、そこにある哲学は「人生は、どんなにつらいことがあっても生きるに値する。そしてこの人生を生きてゆくために

は、想像力(希望)と勇気とサムナーだ。矯正治療には健康保険が適用されず現金取引に40年以上携わってきた矯正歯科医は、今回の独立行政法人(ある意味での民営化を含めて)についての最初の理解者であったと思っている。

定年退官にあたって

大学院医歯学総合研究科教授
渡辺 英伸



1979(昭和54)年7月1日九州大学から新潟大学へ転任し、24年間の新潟大学生生活を経て、2004年3月31日で定年退官となります。福岡での14年間、新潟での24年間、計39年間を通じて、多くの人達と一緒に消化器疾患を病理学的側面ばかりでなく、臨床的側面からも分析することができ、感動の連続を共有することができたことに感謝しています。

これら感動は、新潟県で消化器疾患を愛する人々の協力があってこそ、得られました。県内から寄せられた材料は、2004年2月13日現在、胃手術材料が15,285例、腸手術材料が11,052例、肝・胆嚢・膵手術材料が15,351例集積されています。各症例の肉眼記述所見、肉眼写真、切出し肉眼写真、組織診断はすべて個々人がコンピュータ画面上で利用しやすいようになっています。また、パラフィンブロックも簡単に取り出せるように保管されています。このように整理された消化器資料を有する施設は日本に、世界に、ありません。資料の整理・整頓は、教室の職員・医師が24年間という長

退官

平成15年度



整理された消化器資料を有する施設は 日本に、世界に、ありません。 世界の人が見ることができるシステムに 仕上げる必要があります。

い年月、昼夜を分かたずに努力してくれた成果です。

この資料が、新しい世代への宝として、消化器疾患研究の新しい起爆剤として、新潟で、日本で、生かされることを期待しています。そして、これを世界の人が見ることができるシステムに仕上げる必要があります。消化器疾患に関する“新しいうねり”が新潟から発信されると信じています。

退官にあたって

積雪地域災害研究センター教授
小林 俊一



昭和40年から昭和60年まで北海道大学で20年間過ごし、それから今年3月まで新潟大学で19年間を過ごしたことになります。北大でも新大でも私は雪氷学に関する研究所に所属しておりましたので、学部学生との接触は大学で過ごした時間が長かった割には希薄だったと思います。北大では大学院生のほかは学部学生がおりませんでしたので、セミナー以外は講義をしたことがありませんでした。新大では赴任すると直ぐに、教養部と工学部で非常勤講師という名目で講義を担当しました。学生からは教師らしくない教師と評価された記憶があります。私は講義の下手な教師という意味で受け取っておりますが、学生はまじめで講義中に学生のおしゃべりで講義がやりづかったことは一回もありませんでした。学生の評価とは裏腹に私は気持ちよく講義をさせていただきました。私は学生には独学の精神を大切に講義を通

じて説いてきたつもりです。独学の精神を貫くためには、問題の対象を好きになることです。大学を卒業して、色々な問題と直面してその解決に当たるとき、学生時代の独学の修行が役に立つはずで、学生時代に失敗を重ねて試行錯誤した経験こそが社会に出てから貴重な力となります。最後に、私は工学部土木の卒論と大学院自然科学研究科には併任となっておりましたので、幾人かの卒研生と院生との思い出をもつことができたことに深く感謝しております。



学生時代に失敗を重ねて試行錯誤した経験こそが
社会に出てから貴重な力となります。



新大広報 BackNumber

- ▼147号 <特集：卒業、退官>
- ▼148号 <特集：ひとりぐらしをデザインする>
- ▼149号 <特集：新潟大学を覗きみよう>
- ▼150号 <特集：あさひまち物語>

バックナンバーが欲しい方は、事務局の学生部学生課まで受け取りに来て下さい。新大広報のバックナンバーは、<http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp/kouhou/>でも見ることができます。大学の魅力を先輩たちが語っています。ぜひ、どうぞ。

新潟大学
広報誌

Niigata University
Campus Magazine
新大広報
CampusForum

学生編集委員 募集!!

自分で投稿した記事や写真がどのようにしてできるか。新大広報の編集会議に参加して、新大広報の制作に参加しませんか。

■問い合わせ先：学生課(262-7330)
または各学部の広報委員まで。

編集後記

春の息吹が感じられるこの季節は、いつでも、別れと出会いが交錯する時です。自分にとって新潟大学とは何であったのか、旅立ちを前にして心に問う学生と教員の方々の様々な声を掲載したのが、この151号です。思い出を語る諸先輩のことばから、新潟大学の魅力を改めて感じていただけたら幸いです。(編集委員長 石坂妙子)

日頃の行いが悪い私は、新年を迎えたばかりの気分であるうちに、あっという間に3月になってしまったという、体たらくです。編集委員で最も仕事をしない、ブラックリストNo.1であることを申し訳なく思うとともに、出来上がった151号の校正を眺め、他の編集委員のご苦労に感謝申し上げます。(編集委員 牛木辰男)

毎年ながら卒業生、停年退官の諸先生を送りだす3月で、今年は特に純粋な国立大学の最後の諸氏を送りだすことになりました。いつも学生に“本当に困ったときは大きく深呼吸して、人生の中でこれが一番面白いことなのだと捕らえ直せ”と送る言葉にしております。(編集委員 大矢 進)

「新大での思い・・・」は卒業・修了する人、退官する先生、そして在学生と一緒に過ごした新潟大学での貴重な年月が詰まっています。皆が共有した経験の証です。困難に遭遇したときには表紙の新潟大学のマークを思い出してください。きっと励みになると思います。自分の元気の源なのだから。(編集委員 山口芳雄)

広報委員会第1部会

● 部会長	五十嵐 由利子 (学長特別補佐)	Tel 262-7165	igarasiy@ed.
● 編集委員長	石坂 妙子 (教育人間科学部)	Tel 227-7116	ishizaka@ed.
● 委員	井山 弘幸 (人文学部)	Tel 262-6573	hrykiym@human.ge.
	谷 喬夫 (法学部)	Tel 262-6493	tani@jura.
	濱田 弘潤 (経済学部)	Tel 262-6538	khamada@econ.
	大矢 進 (理学部)	Tel 262-6142	ohya@np.gs.
	牛木 辰男 (医学部医学科)	Tel 227-2058	t-ushiki@med.
	川瀬 知之 (歯学部)	Tel 227-2927	kawase@dent.
	山口 芳雄 (工学部)	Tel 262-6752	yamaguch@ie.
	紙谷 智彦 (農学部)	Tel 262-6625	crenata@agr.
● 事務局(学生部)	Tel 262-7330 Fax 262-7515 gakusei@adm. (E-mailのアドレスは、niigata-u.ac.jpの表記を省略しています。)		
● 新潟大学ホームページ	http://www.niigata-u.ac.jp/		
● 新潟大学学生部ホームページ	http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp		

この広報は再生紙を使用しています。